

## 博士學位論文要約

論文題目： 横光利一とその時代—モダニズム・メディア・戦争—

氏名： 黒田 大河

要約：

- ・ 題名 横光利一とその時代—モダニズム・メディア・戦争—
- ・ 目的と章構成

本論は横光利一の作品研究を中心として、昭和文学史におけるモダニズムの可能性とその限界を明らかにすることを目的とする。モダニズムとは近代という時代の持つ限界を意識しながらそれを更新しようとする思想・芸術・運動のことである。日本近代にモダニズムは存在し得たのか。横光利一の諸作品を検討することでその意義を明らかにする。

論文ではモダニズムの時代性、横光利一の異文化体験、メディア論という大きく三つの方向から検討をすすめるが、各論点に共通する課題は次の通りである。

- ・ 「三派鼎立」構図を相対化し、新感覚派を再評価すること。
- ・ モダニズムとしての震災後文学と戦後文学との繋がりを考察すること。
- ・ 横光の外地体験と作品に見られる相対化の構図について考察すること。
- ・ 戦争責任論を超えて『旅愁』を再読すること。

これらの論点は次のように関わりを持つものである。

昭和文学史における三派鼎立図式とは、自然主義、新感覚派、プロレタリア文学を新旧と左右の対立として捉える文学史観であるが、モダニズムを自然主義的描写への批判として捉えた上、社会意識の欠如として否定する進歩史観が前提とされている。横光利一の再評価からモダニズムの価値を再検討することで、戦前のモダニズムと戦後文学との繋がりを確認することが出来ると考える。

また横光利一評価の課題として『旅愁』評価がある。第二次世界大戦の敗戦後において戦争責任論のなかで批判された文学者としての横光評価は、戦中に東西文化の対立を描いた『旅愁』を書き継いだことと深く関わっている。『旅愁』の再評価からモダニズムの再検討を行なうことが出来ると考える。

第三に、『上海』から『旅愁』に繋がる横光利一の作品史における外地体験＝異言語体験を考察することで、『旅愁』を再評価することが可能となる。日本回帰と見られる言説にも相対化の構図が貫かれていることを分析から見出そうと考える。

昭和初期から始まる現代とは、人間が労働力という名の数として扱われる時代であり、資本主義の矛盾に対抗するマルクス主義が猛威をふるった時代でもあった。メディアのもたらした世界的同時性は、思想と芸術の世界に大きな変化をもたらした。モダニズムとはそのような現代の表現であり、われわれの時代もまた、二〇世紀的なものを精算し得たわけではない。横光利一の再評価からこのような現代を対象化することが本論考の最終的な

目的である。

以下に章構成を示す。

序論	横光利一—モダニズム文学の可能性
第Ⅰ部	横光利一とモダニズムの時代
	第一章 モダニズムの光源—映画的認識と形式主義文学
	第二章 「ナポレオンと田虫」—歴史である「かのやうに」
	第三章 「純粹小説論」と主知主義とをめぐって
	第四章 「故郷」としての「関西文化圏」—「三つの記憶」から
第Ⅱ部	異文化体験をめぐって
	第五章 『上海』試論—身体と言語をめぐって
	第六章 アジアへの旅愁—横光利一の〈外地〉体験
	第七章 作品としての『歐洲紀行』—『旅愁』への助走
	第八章 横光利一の回帰—欧州体験から『旅愁』へ
	第九章 『旅愁』論のアポリア—ポストコロニアル・ナショナリズム研究の領域から
	第一〇章 堀田善衛と上海—「祖国喪失」と「無国籍」のあいだで
第Ⅲ部	メディアと戦争をめぐって
	第一一章 「国民」統合の〈声〉の中で〈書く〉こと —時局雑誌『放送』に見る戦時放送と文芸（一）
	第一二章 重層化する〈声〉の記憶 —時局雑誌『放送』に見る戦時放送と文芸（二）
	第一三章 『夜の靴』—〈敗戦〉という「不通線」
	第一四章 「微笑」論—横光利一の戦中・戦後
初出一覧	
あとがき	
索引	

・ 各章要約

第Ⅰ部 横光利一とモダニズムの時代

第Ⅰ部ではモダニズム文学の特色を映画的認識と概観した上で、横光利一作品の文体、同時代作品と思潮との関わりを検討する。「純粹小説論」の提起する問題領域を、阿部知二、春山行夫らの主知主義に結んで考察する。また、横光における「故郷」概念と昭和十年代における故郷喪失者の文学の概念との関わりを探る。

第一章（モダニズムの光源—映画的認識と形式主義文学）では日本近代文学史においてモダニズムとは何だったかという問題を、映画という新しいメディアの誕生に伴う認識論的な構図の変化という側面から論じる。戦後の荒地派から昭和モダニズムへ遡行し、モダニズムにおける映画的認識の特質を『上海』、「機械」の分析から明らかにすることを目的とした考察である。

第二章（「ナポレオンと田虫」—歴史である「かのやうに」）では横光利一作品の研究史をふまえながら独自の視点を示す。新感覚派時代の作品として「ナポレオンと田虫」を分析し、作品における表現主体による直喩的表現と、横光作品の歴史記述における視点の問題を結びつけて考察する。「ナポレオンと田虫」の比喩表現をモダニズムの特色として意味づけた考察である。

第三章（「純粹小説論」と主知主義とをめぐって）では阿部知二『主知的文学論』と横光利一「純粹小説論」の影響関係と内的連関性を考察する。特に、文学的伝統の受容と対読者意識の分析から、「純粹小説論」における伝統回帰の発想の在り方を批判的に検討する。

第四章（「故郷」としての「関西文化圏」—「三つの記憶」から）では、東京と対比的に析出された「関西文化圏」という文化的なまとまりを一つのフィクションとして捉え、その地政学的な付置を横光利一、および小林秀雄ら同時代作家と対比しつつ検討する。故郷喪失者としての横光が「関西文化圏」を媒介として故郷幻想を紡ぎ出す有り様を、「三つの記憶」から横光の故郷イメージが複数に分裂してゆく様相から分析、小林秀雄の故郷喪失意識とは異なった意味で「関西文化圏」の広がりをも「故郷」とする横光像を見出す。

## 第Ⅱ部 異文化体験をめぐって

第Ⅱ部では『上海』と『旅愁』に見られる異文化体験の意味を考察する。特に欧州体験とアジア体験の関わりを明らかにするとともに、金鍾漢、永井荷風、保田與重郎などの同時代人の言説を補助線としながら、上海、京城、パリでの異言語体験の意味を考察する。また、ポストコロニアル批評と、ナショナリズム批判の文脈から『旅愁』研究史を再考するとともに、堀田善衛論では横光の課題を戦後文学に結んで考察する。

第五章（『上海』試論—身体と言語をめぐって）では、横光利一の上海体験は、身体と言語の物質性に突き当たる異言語体験でもあったことを指摘。その前提から『上海』に描かれた言語の階層性と視線を媒介とした身体表現を分析する。他者としての中国人の視線に動かされ、群衆の身体と向き合っている主人公の意味を論じる。

第六章（アジアへの旅愁—横光利一の〈外地〉体験）では、横光利一の『旅愁』が欧州体験の形象化であったと同時に、執筆過程が日中戦争から「大東亜戦争」へと至る時代と重なることで、横光の〈外地〉認識をも反映するという前提から、『旅愁』における中国体験、朝鮮体験を横光の「国語」意識の問題を視野に入れて分析する。横光の表現にとってアジアが「他者」から「内なる」他者に変容する過程が、戦時下のアジア認識に結ばれる問題だったことを論じる。

第七章（作品としての『歐洲紀行』—『旅愁』への助走）では、横光利一の欧州体験を『歐洲紀行』を中心として分析する。引用された書簡の検討や、改稿過程の分析から日本とパリの相対化という構図を見出す。パリ到着後の記述を検討すると、現地から送られた原稿と単行本化にあたっての加筆、さらに書簡を引用することで得られる効果など、体験を作品として虚構化する仕掛けが様々に施されていることがわかる。体験が再構築されるなかで、むしろ体験の深刻さが隠蔽されている。作品としての『歐洲紀行』には「巴里の憂鬱」を対象化する苦闘の跡が隠されているのである。

第八章（横光利一の回帰—欧州体験から『旅愁』へ）では横光利一における伝統回帰を

再検討する。欧州体験後に西洋を相対化する視線を獲得する過程で、対照的な存在として永井荷風を意識していた可能性を検証、具体的な表現の分析を通じて保田與重郎、萩原朔太郎らの日本回帰の在り方との交錯を論じる。

第九章（『旅愁』論のアポリアーポストコロニアル・ナショナリズム研究の領域から）では、横光利一研究における研究史を整理し戦時下の問題を論じる際に生じるアポリアを指摘した上で、『旅愁』の表現を再検討する。『旅愁』におけるナショナリズムをいかに評価すべきか、特にナショナリズムの持つ危険性と、植民地のナショナリズムの持つ意味が書き込まれていることを指摘する。

第一〇章（堀田善衛と上海—「祖国喪失」と「無国籍」のあいだで）では、堀田善衛の「祖国喪失」、「歯車」を分析することで、戦中・戦後の上海を対象とした表現の特質を明らかにする。堀田は、作中に焦点人物として「祖国喪失者」を置き、「国家」という非情な枠組みと、「故郷」という土に染みついた身体化された観念を描く。堀田は、海外植民地都市上海の戦中・戦後の変遷を、横光利一『上海』に描かれた「領土としての身体」を相対化し、生きた身体性を取り戻す過程として描く。そこに亡命者・無国籍の人々があり得べき可能性として描かれていることを指摘する。

### 第Ⅲ部 メディアと戦争をめぐって

第Ⅲ部では戦時下に於けるラジオ放送と活字メディアの関わりを中心に分析、戦時メディアの可能性と功罪を論じると共に、横光作品がそれらのメディア空間を意識した上で戦中・戦後を描き得たことを明らかにする。横光が震災後の風景の中に「声音の奇形物」としてラジオを取り上げていたように、二〇世紀前半を大きく変貌させたメディアのひとつがラジオ放送である。空間的距離を超えて聴取者を一体感に誘うラジオという装置は、その後の半世紀を映像メディアが席卷する以前の、大衆操作の装置である。マスメディアの持つ大きな力が、戦争という最大のイベントによって鍛えられた、そんな二〇世紀前半期の風景が、横光という作家の短い戦後に影響を与えている。

第十一章（「国民」統合の〈声〉の中で〈書く〉こと—時局雑誌『放送』に見る戦時放送と文芸（一））では、日本放送協会が発行した時局雑誌『放送』を対象に、放送メディアが大衆を「国民」として統合するさまを検証する。高見順、火野葦平など徴用作家、さらに室生犀星を中心に、〈書く〉ことで戦争へと動員された文学者が、いかにラジオ放送の〈声〉と関わったかを論じる。

第十二章（重層化する〈声〉の記憶—時局雑誌『放送』に見る戦時放送と文芸（二））では、さらに『放送』と文芸の関わりを検証する。丹羽文雄、上田廣らの「放送文芸」（ラジオドラマ）を分析、聴取者に対する啓蒙的な〈声〉の力を考察する。また、間宮茂輔、鶴田知也などの作品分析から、聴取者が〈声〉なき〈声〉を聴き取った可能性を指摘する。

第十三章（『夜の靴』—〈敗戦〉という「不通線」）では、前章までのメディア分析を前提として、横光利一の敗戦日記形式の作品『夜の靴』における虚構性を分析する。「旅愁」の作者としての語り手「私」がラジオ放送を回避する姿勢から、「玉音放送」に象徴される〈敗戦の儀式空間〉からの距離を読み解く。様々な敗戦体験の複数性を描いた作品として敗戦日記形式の小説『夜の靴』を論じる。

第一四章（「微笑」論—横光利一の戦中・戦後）では、横光利一の遺作である『微笑』を、戦後から戦中を対象化する表現として論じる。論文の前半部分では、モデルとなる事実を、戦後の新聞報道から分析する。作中の虚構と見える設定の持つ現実性と同時に、戦時下の「噂」によって、真実が明らかになるという逆説が作中の「噂の時空」であり、作品の言説は意識的に構築されている。「噂の時空」には報道規制下の流言との関わりを見出せる。当時の検閲資料の分析から戦時下の言説空間を再現する。論文後半では、前記のような作品世界を成立させるための語りの技法を分析する。『微笑』という作品の達成とは戦後になって戦中の「噂の時空」を対象化し得たことであり、そのために「梶」に焦点化しながら、あえて真偽を明らかにしない語りの技法が用いられている。

・ まとめ

以上の本論の考察から、結論として見出されたことを列挙し、総括する。

第Ⅰ部、第一章では、横光利一『上海』に代表される上海イメージの検討によって、断片化した言語によって捉えられた上海のイメージが、詩と小説というジャンルを横断していることが分った。また『機械』の検討からは、見えざる映画機械を作動させる光源とは、読者という観客の視線であり、映画的認識が現代のメディア空間を形成していることが確認できた。

第二章では、「ナポレオンと田虫」の分析から、実際には存在しない類似性を成立させる言説の暴力、表現における直喩的認識が、横光作品における歴史を成立させる意味作用と言えることが分った。直喩的認識は歴史である「かのやうな」ものとしてテキストを織り上げているのである。

第三章では、阿部知二の「主知」概念がその根拠を「伝統」へと求めるのに対して、知二に共鳴しながら横光もまた「純粹小説論」において「伝統」を課題としていくことが分った。「純粹小説論」における「民族」と「大衆」とが、その空虚な形式に「国民」という内容を盛られる危険性が、戦時下へ向かう表現を検討する際の課題である。

第四章では、『旅愁』から『夜の靴』への過程で、横光にとっての「故郷」は、〈日本的〉なものの観念をへて、分裂していったが、そのプロセスで「関西文化圏」は「故郷」の痕跡／イメージとして偏在することが見出された。「故郷喪失者」としての横光利一は「関西文化圏」を媒介として虚構の「故郷」への帰還を果たしたと言える。

第Ⅱ部、第五章では、『上海』の主人公である参木が、母語である日本語を差異化、特権化しないが故に、身体としての日本が浮上してくることが分った。国家によって意味づけられ、対象化された身体と、〈他者〉としての「支那人」の群衆とともに生きたいという願望の相克が『上海』に指摘できる。

第六章では、『旅愁』において「支那」の〈他者〉性が表現されながら、朝鮮については〈他者〉性を見失い「裡なるもの」として美意識のレベルでの共感のみが描かれたことが分った。異言語体験から言語の意味の差異性を認識した横光だったが、ついに「国語」の外に出ることは出来なかったと言える。

第七章では、『歐洲紀行』の分析から明らかとなった相対化の構図が、『旅愁』において

自己のルーツを探り続ける主人公矢代の姿につながる事が分った。矢代は単純な日本主義者ではなく、日本をも相対化し続ける役割を負わされており、『旅愁』は相対化の末に新たな地平を求めた作品として捉えられる。

第八章では、『旅愁』周辺の作品と横光の言説とを検討し、二項対立図式を相対化し続けるのが「梶もの」であり、『旅愁』を補完することが分った。横光は「厨房日記」から「微笑」まで時代と向き合いながら書き続けたのであり、相対化の運動としてのその作品は、日本回帰として単純に定義されるものではなかったのである。

第九章では、『旅愁』における矢代の〈病〉とは近代空間に対するオルタナティブなものへの違和ではなく、むしろ近代国家によって保障された空間から排除されるエグザイルへの不安であったことが分った。西洋近代合理主義のナショナリズムを批判しながら、日本もまた宗主国として植民地のナショナリズムを包摂する欺瞞が、『旅愁』というテキストにナショナリズムの重層性として描き出されている。

関連して堀田善衛を検討した第一〇章では、「祖国喪失」という観念を裏打ちする「祖国」という語の孕むナショナリズムと、「喪失」という語の持つ寂寥感とを描き出しながら、ディアスポラ達を引き裂く「国家」という非情な枠組みと、「故郷」という土にしみついた身体化された観念が見出された。堀田は横光利一の問題意識を引き継ぎながら、「祖国」という言葉に新たな内実を求めようとしていた。

第三部、第一章では、ラジオ放送と文学作品の検討から、「国民」を統合する戦時下のメディアの中で、ラジオの〈声〉とはべつの場所で文学作品を〈書く〉ことに賭けた高見順、現場からの〈声〉を〈語る〉ことが〈書く〉ことと相即していた火野葦平、現場に身を置きながらも〈声〉を想定して〈書く〉ことの出来た上田廣など、表現者たちの特質が見出された。しかし、言葉の「職人」として〈書く〉ことが表現者としての特質である室生犀星は、「国民」の〈声〉そのものとなったのである。

第一二章では、ラジオドラマの検討から、ラジオ聴取の可能性を見出した。聴取者がラジオの背後に聴きとったもう一つの〈声〉とは、「国民」の紐帯から排除されたものたちの〈声〉なき〈声〉である。『放送』を検討することは、語られなかった沈黙の〈声〉を意識化するための作業なのである。

第一三章では横光利一の敗戦小説『夜の靴』を検討した。個別の戦争体験から生まれた様々なる〈敗戦〉は、共同体験に収斂させることの出来ない「不通線」をそこに孕んでいる。個別の敗戦体験を抱えたまま人々は〈戦後〉を生きなければならない。敗戦から再び「一二月八日」までの〈戦後〉を見つめる『夜の靴』には横光の〈戦後〉が遺されているのである。

第一四章では、横光の遺作「微笑」を検討し、その達成は戦後から戦中の噂の時空を対象化し得たことであり、そのために「梶もの」としての梶の設定が語りの方針として最大限に生かされたことが分った。「微笑」には戦後から戦中を断罪するだけではなく、戦後と戦中の時空が相互に問いかけを発するような構造が成り立っていた。相対化の末に二項対立を越え出る立場を『旅愁』で模索し続けた横光は、戦後、再び分裂する世界の現実と対峙しなければならなかったのである。

以上のように、横光の試みは「三派鼎立」構図に収まるモダニズム像を超え、相対化を貫こうとするものであった。その意味で戦後文学と繋がる意義を持つものである。また、〈外地〉体験によって得た異言語体験がナショナリズムに留まらない相対化の構図をもたらすものであることも明らかとなった。したがって戦争責任論を超えて『旅愁』を再評価することは本論を通じて可能となったと考える。

本論を通して戦争へと至る時代を生きた文学者の代表として横光利一を検討してきた。戦争責任を負った文学者として葬り去るのでは正しい意味での批判にはならない。時代の限界を背負いながら表現されようとしたことに真摯に向き合うことを心掛けてきた。本論での考察によって、横光利一の時代がわれわれの現代を逆照射することを望むものである。

・ 主な引用文献・参考文献

- 片岡良一『近代派文学の輪郭』（一九五〇年十一月、白楊社）  
中山義秀『台上の月』（一九六三年四月、新潮社）  
高見順『高見順日記』第五巻（一九六五年一月、勁草書房）  
吉田健一『東西文学論』（一九六六年八月、垂水書房）  
梶木剛編『井上良雄評論集』（一九七一年十一月、国文社）  
前田愛『近代読者の成立』（一九七三年十一月、有精堂、後『前田愛著作集』第二巻、一九八九年五月、筑摩書房）  
石上玄一郎『彷徨えるユダヤ人』（一九七四年一〇月、人文書院）  
井上謙『評伝横光利一』（一九七五年一〇月、桜楓社）  
林鍾国著、大村益夫訳『親日文学論』（一九七六年一二月、高麗書林）  
平野謙『昭和文学私論』（一九七七年三月、毎日新聞社）  
工藤恒治『横光利一とやまがた』（一九七八年七月、東北出版企画）  
神谷忠孝『横光利一論』（一九七八年一〇月、双文社）  
前田愛『都市空間の中の文学』（一九八二年一二月、筑摩書房）  
山崎國紀『横光利一論—飢餓者の文学—』（一九八三年一〇月、和泉書院）  
安永武人『戦時下の作家と作品』（一九八三年一二月、未来社）  
亀井秀雄『身体・この不思議なるものの文学』（一九八四年一二月、れんが書房）  
櫻本富雄『戦争はラジオにのって』（一九八五年一二月、マルジュ社）  
川村湊『〈酔いどれ船〉の青春—もう一つの戦中・戦後—』（一九八六年一二月、講談社）  
小森陽一『構造としての語り』（一九八八年四月、新曜社）  
竹山昭子『玉音放送』（一九八九年三月、晩聲社）  
菅野昭正『横光利一』（一九九一年一月、福武書店）  
中野重治『敗戦前日記』（一九九四年一月、中央公論社）  
竹山昭子『戦争と放送—史料が語る戦時下情報操作とプロパガンダー』（一九九四年三月、社会思想社）  
平井正『20世紀の権力とメディア—ナチ・統制・プロパガンダー』（一九九五年一月、雄山閣出版）  
吉見俊哉『「声」の資本主義』（一九九五年五月、講談社）

- 堀場清子『原爆表現と検閲』（一九九五年八月、朝日新聞社）
- イ・ヨンスク『「国語」という思想』（一九九六年一二月、岩波書店）
- 坪井秀人『声の祝祭—日本近代詩と戦争—』（一九九七年八月、名古屋大学出版会）
- 赤間啓之『分裂する現実—ヴァーチャル時代の思想—』（一九九七年一〇月、日本放送出版協会）
- 沢木耕太郎『オリンピアーナチスの森で—』（一九九八年五月、集英社）
- 小岸昭『マラーノの系譜』（一九九八年六月、みすず書房）
- 津金澤聰廣編『現代日本メディア史の研究』（一九九八年六月、ミネルヴァ書房）
- 尾嶋義之『志村正順のラジオ・デイズ』（一九九八年八月、洋泉社）
- 高島直之『中井正一とその時代』（二〇〇〇年三月、青弓社）
- 濱川勝彦『論攷横光利一』（二〇〇一年三月、和泉書院）
- 姜尚中『ナショナリズム』（二〇〇一年一〇月、岩波書店）
- 吉見俊哉編『一九三〇年代のメディアと身体』（二〇〇二年三月、青弓社）
- 竹山昭子『ラジオの時代』（二〇〇二年七月、世界思想社）
- 佐藤卓己『「キング」の時代—国民大衆雑誌の公共性—』（二〇〇二年九月、岩波書店）
- 後藤嘉宏『中井正一のメディア論』（二〇〇五年一月、学文社）
- 丸山直起『太平洋戦争と上海のユダヤ難民』（二〇〇五年二月、法政大学出版局）
- 子安宣邦『日本ナショナリズムの解読』（二〇〇七年三月、白澤社）
- 山本亮介『横光利一と小説の論理』（二〇〇八年二月、笠間書院）
- 大橋毅彦、趙夢雲、竹松良明、山崎真紀子、松本陽子、木田隆文編『上海 1944—1945 武田泰淳『上海の螢』注釈』（二〇〇八年六月、双文社出版）
- 紅野謙介編『堀田善衛上海日記—滬上天下一九四五—』（二〇〇八年一十一月、集英社）
- 河田和子『戦時下の文学と〈日本的なもの〉—横光利一と保田與重郎—』（二〇〇九年三月、花書院）
- エマニュエル・レヴィナス著、合田正人訳『全体性と無限—外部性についての試論—』（一九八九年三月、国文社、原著一九六一年）
- ジェラルド・ジュネット著、花輪光、和泉涼一訳『物語のディスクール』（一九八五年八月、水声社、原著一九七二年）
- W・J・オング著、桜井直文他訳『声の文化と文字の文化』（一九九一年一〇月、藤原書店、原著一九八二年）
- ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳、増補版『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』（一九九七年五月、NTT出版、原著一九八三年）
- エドワード・サイード著、大橋洋一他訳『故国喪失についての省察 I』（二〇〇六年四月、みすず書房、原著二〇〇〇年）